

チベット史における漢文史料の誤伝

山口 瑞鳳

はじめに

チベット古代史において重要な史実が誤り伝えられていることは非常に多い。九世紀半ばに吐蕃王朝が分裂崩壊してから、仏教徒が戒律を再興して秩序を回復した十一世紀前半までの混乱した時代に、古代に関する史料が散佚したまま、仏教文献のように熱心に蒐集されることがなかったためと、チベットの歴史家が、史実を忠実に再構成して記録することに意義を認めないで、むしろ僅かの史料も仏教の普及に役立てる話に仕立て上げるのを専らとしたので、このような結果になった。

これらに加わえて、十一世紀⁽¹⁾以後、特に十四世紀に、漢文史料の訳出されたものやそれらの要約のようなものがチベットに伝えられると、そこに含まれていた誤訳・誤解が時には増幅されてチベット人の間に広まり、チベット史の編集に際しても、信憑性の高い知識と評価されたため、歴史家の記述が歪曲される足場となった場合が

少くない。

筆者は、かねてからこの種の問題に興味を抱いていくつかの論述を試みた。ソンツェン・ガムポ (Srong btsan sgam po, 581—649) とティソン・デツェン (Khri srong lde btsan, 742—797) との混同、文成公主と金城公主との混同⁽²⁾などは、はじめに述べた方の類型に属し、十六羅漢が漢土に招かれたとか、ダルマターラ居士が彼等に⁽³⁾仕えたなどという話は、後の方の類型になるのであろう。

本稿では、後者の類型に属して、チベット史料では史実とされているが、漢文史料ではその跡もなく、似ても似つかぬことから歪曲されていた歴史的事件と、それに関連した伝説の変容過程とを紹介してみよう。

I

《チベット古代史》としては、史料を忠実に紹介しているものというので『学者の宴』の⁽⁴⁾jaの章は有名であり、広く利用されているが、そこには次のような話も示されている。

その時シナ軍がラサまで突入した。忿怒王メツェクが胸襟を開いて化現した軍を繰り抜けることで、敵を退散させな⁽⁵⁾った (KGG, I, 70a)。

以上は本文であって、その割注には、

ガル (Hgar) がシナ国を潰滅させた意趣がえしに、法王ソンツェン・ガムポの逝去後すぐにシナは多くの戦闘を(チベット)と交えたが、大臣ガルが將軍になったので、いく度も打ち負かされた。後に(この)大臣

も戦陣で歿した。マンソン王 (Mang srong = Mang sion mang rtsan, 642—676) が歿した時、五〇万のシナ軍がチベットに至り、ティツェ・マルポ宮 (Khrī rtsē dmar po) を炎上させた。釈迦牟尼像を最初みつげ出せなかったが、後にそこにましますと知ったけれど、文殊像が画かれていたので壊すことが出来なかった。(しかし)阿闍金剛像を持ち去った。その時ラサのメツェクが両の御手の拳を互に組んで降魔の印を結んでおいであつたが、胸襟をお開きになると化現の軍勢が現れたので、シナ軍は全く怖れて退散した。阿闍金剛は東方のドマ高原に七日間置き去りにされたので、(その地は) チョボ・オギェルタン (教主が労苦なされた高原) と名づけられた。シナの記録によると、大臣ガルの長子が將軍となつてシナ軍が敗られたとあるから、彼等 (シナ人) には人間の軍の様相が現じたのである。(KGG, f. 70a¹⁻⁵)

とあつて、本文についての解釈が示されている。ほぼ同じ頃成立した『青冊史』のKa⁽⁶⁾章ではこのことについて年次を明示して簡単に次のように云っている。

シナとチベットの両国王は時折和解し、時折戦い、領土を争つて勝敗を重ねた。とくにマンソンが王位について後二一年目⁽⁷⁾のかねのえ午(六七〇年)の年にチベット軍が唐の国を攻撃し、ユグルの国をすべて取つた (DTN, Chapt. Ka, f. 24a⁵⁻⁶)。

年代的にいつてマンソン歿後と在位中の相違があるではないかと読者は疑念を抱くであろうが、両者の記述のもとになつたと思われる十四世紀の二つの史書を夫々見ると、前者の記述に関して『王統明示鏡』⁽⁸⁾は次のように記している。

それから御孫マンソン・マンツェンが十三歳になった時王権を執った。妃ト女ティムルー ('Bro za khim / Khri ma) lod) を娶られて、王国に權威を行使した。この時、シナの王がソソツェン・カムボ王の在世しないのを知って、ガル・トソツェン) がシナの国を潰滅させたことなどを憶い出し、シナ軍五〇万を派遣してチベットを征服した時 (Bod jons pa dang) (9)、釈迦牟尼像を持ち出すというたぐいの噂が生じたのに怖れをなして、釈迦牟尼像をラモチェからラサ (≡チヨカン) にお移した。南門の鏡のあるところに安置して、門 (10) にかべを塗って (上に) 文殊像を画いたのであった (Dzhangs so) (GSM, f. 81b¹⁻⁶, L. f. 77a³⁻⁵)。

とある。むしろ、ラモチェの釈迦牟尼像をチヨカンに移した由来として、唐軍の持ち去りを怖れた結果と説明し、像の貴重なことをいいたかったかのようにみえる。また、秘匿の時期もマンソン・マンツェン在位中となっている。

しかし、『王統明示鏡』は、巻末に近く、改めて漢文史料系の話をもとめているが、そこには注記の形で次のように述べている。

シナ軍がチベットに至ってポタラが炎上した。釈迦牟尼像を探したが手に入れられず、阿闍金剛を半日行程の地にまで運び去ったといわれるなど、シナの史書にある。この王の時 (である) (GSM, f. 95b², L. 91a³⁻⁴)。佛像を実際を探したことに変わっている。この後にマンソン・マンツェン王の記述が続いている。

チベット語で「この王の時」*kyal po 'd'i dus*と書いてあれば、「次に示す王の時」の意味もある。事実、本文中の続くところにマンソン時代のこととして、

その時、シナ軍がチベットに至って征服すると、チベットもまた宰相ガルが將軍となって、チベット軍二〇万をひきつれてシナ軍を敗北させた。周りの国などを征服し、宰相ガルも陣歿した (GSM, f. 95B^v-1L, f. 91A^v-9^v)。

と示している。しかし、ここにいう宰相ガルは、トンツェン・ユルスン (mGar stong btsan yul zung) とは、長子ともなっていない。後半の記述は、後段で見えるように『通鑑』中に烏海に至る前に郭待封の軍が吐蕃軍二〇万と遭遇したとあるものに由来するのであろう。いずれにしても『学者の宴』は主として『王統明示鏡』に拠って記事を更に拡大して述べているのである。

『青冊史』の方の記述のものは『赤冊史』⁽¹²⁾に見られる。

シナとチベットの両国王は時折和解し、時折戦い、領土を争って勝敗を重ねた。とくにかねのえ午の年、チベットの軍人が唐の王国を攻撃し、ユグルの国をすべて取ったので、シナの王は大臣シェシンク (Se bzhin khru 薛仁貴) に十万の軍を伴わせて送り出し、ラサまで至った。大臣ガルの長子が將軍となってシナ軍すべてを敗北させた (HLD, p. 96^v-5; P. p. 19^v-9^v)。

この文の前半は『青冊史』にそのまま用いられ、最後の《ガルの長子》云々は、『学者の宴』の最後の一節に、『化現せる軍』が、《シナ人には人間の軍の様相》に現じたという説明と共に引用されているのである。

いずれにせよ、唐軍のラサ攻撃という記述は『王統明示鏡』『学者の宴』と『赤冊史』『青冊史』に共通して見られる。チベット史書のうちで唐軍のラサ攻撃を伝えるのは、前後を通じてこの一箇所のみであるから、同一の

史実として記述されていることがわかる。

II

後代の史書におけるこの記述の影響を見ると、『新赤冊史』のうちには、プトウンに従って、マンソン・マンツェンの代りにグンソン・グンツェン (Gung strong gung btsan 621—643) の名を用いてはいるが、次のように示されている。因みにプトウン『仏教史』にはこれに直接関する記述はない。

この王の御代にシナ軍がチベットに至ってマルポリが炎上した。トウルナンにかくされたシャカムニ像は奪われなかったが、阿閼金剛像は半日行程の地に持ち去られたとシナの記録にある。再び大臣ガルがチベット軍十万を率いてシナの国を征服した。ガルもその戦陣で歿したと云われる (DMS, I, 23a¹⁴)。

とあって、ここではガルの長子がガルとのみ示されている。数字は異なるが、『王統明示鏡』の要約になっていて、やはり《シナの記録にある》と繰り返されている。

一世紀以上おくれでダライ・ラマ五世がその『年代記』⁽¹⁴⁾中に次のように書いている。

その時シナの人達は化身せる王(ソンツェン・ガムポ)が在世しないと知った後、来襲して(ラサの)トウルナンに至った時、メツェクの御像から化現した軍が現れたので逃げかえった。そのかえしに、ガルがチベット軍十万を率いてシナの人達を征服した。ガルも戦陣で歿した。その後再びシナ軍が至るとの大そうな噂があったので、シャカムニ像を(チヨカンの)鏡のある南門にもってきて、門を壁で塗りこめて(上に)文殊像を

画いた。間もなくシナ軍が突入してきてポタラの宮殿を炎上させた。(彼等は)シヤカム二像を運び去ること
は出来なかつたが、阿闍金剛を半日行程の土地にまでもっていったのであった(ZKG, I, 30a-b)。

『新赤冊史』⁽¹⁵⁾が、デーペン寺シムカン・ユンツァ (gzims khang gong na) の祖になつたソナム・タクバ (bsod nams
grags pa, 1478—1554) の著作であつただけに、ダライ・ラマ五世はその説を全面的に受け入れた⁽¹⁶⁾上で、ガルが唐
軍の攻撃にこたえて、シナを征服したとして、更にその後再びシナ軍がラサを攻撃した際、ポタラ宮が炎上した
趣旨に変更している。これは大変勝手な変更であつて、二回のシナ軍入寇をいうのは、これがはじめてである。
『王統明示鏡』ではじめてポタラ炎上が云われたが、これを受けついで『学者の宴』では、ティツエ・マルポの
名で炎上が記述され、『新赤冊史』では炎上したのがマルポりに変り、ダライ・ラマ五世の『年代記』ではポタラ
宮になつてゐる。『王統明示鏡』の記述そのものの誤りにくわえて、ゲルク派のデーペン寺系の二大人物が増幅し
た誤りは、とおり一遍のものではなかつた。スムバ・ケンポ (Sun pa mkhan po, 1704—1788) の『バクサム・ジ
ユンサン』は、流石にダライ・ラマ五世の説には従わず、ソナム・タクバの記述に従うに留⁽¹⁷⁾っている。ただ、燃
えたのはポタラ宮だとしてゐる。

III

以上見たところから云うと、『赤冊史』の記述が最も古く、しかも具体的である。既に稲葉正就氏の説明で明か
になつてゐるが、⁽¹⁸⁾『赤冊史』は、『唐書』吐蕃伝と『通鑑』唐紀をまとめたと思われるものチベツト訳に依存し

て書かれている。そのもとなつた本は『青冊史』では『ギヤイクツァン』(Gya iug tsang)と呼ばれ、一三二五年国師リンチュンタク (Lin chen tags) によつて臨洮で出版されたものとみられている。

先に『赤冊史』から引用した一文は、後代の『ギャプー・イクツァン』の中にも全く同じ文で示されているから、或は『ギヤイクツァン』そのものの中に既にそのように示されていたのかも知れない。⁽¹⁹⁾

さて、年次をたよりに『唐書』吐蕃伝を見ると、ガル・トンツェンの死にかけて次のように云う。

有子曰欽陵、曰贊姿、曰悉多於、曰勃論。祿東贊死而兄弟並當国。自是歲入迎、盡破有諸羌羈縻十二州。總章中、議徙吐谷渾部於涼州旁南山。帝刈吐蕃入、召宰相姜恪、闡立本、將軍契苾何力等、議先擊吐蕃。……議不決、亦不克徙。咸亨元年(六七〇年)入殘羈縻十八州、率于闐、取龜茲撥換城。於是安西四鎮並廢。詔右威衛大將軍薛仁貴為邏娑道行軍大總管、右衛員外大將軍阿史那道真、左衛將軍郭待封自為副、出討吐蕃、並護吐谷渾還国。師凡十萬余、至大非川、為欽陵所拒、王師敗績。遂滅吐谷渾而盡有其地。

右に相應する『通鑑』唐紀十七、十八の各部分は次のようになってゐる。

(總章二年(六六九年)九月丁丑朔、詔徙吐谷渾部落就涼州南山。議者恐吐蕃侵暴使不能自存、欲先發兵擊吐蕃。右相闡立本以為去歲饑歉未可興師。議久不決、竟不果徙。

(咸亨元年(六七〇年)夏四月、吐蕃陷西域十八州、又與于闐襲龜茲撥換城、陷之。罷龜茲、于闐、焉耆、疏勒四鎮。辛亥、以右衛大將軍薛仁貴為邏娑道行軍大總管、左衛員外大將軍阿史那道真、右衛將軍

郭待封副之。以討吐蕃。且授送吐谷渾還故地。

(庚午、上幸九成宮。)

(秋八月丁巳車駕還京師。)

郭待封先與薛仁貴並列。及征吐蕃。恥居其下。仁貴所言待封多違之。軍至大非川。將趣烏海。仁貴曰「烏海險遠、軍行甚難、輜重自隨、難以趨利。宜留二萬人為兩柵大非嶺上、輜重悉置柵內。吾屬帥輕銳、倍道兼行、掩其未備、破之必矣」。仁貴帥所部前行、擊吐蕃於河口、破之。斬獲甚衆。進屯烏海、以俟待封。待封不用仁貴策。將輜重徐進、未至烏海、遇吐蕃二十余万。待封軍大敗、還走悉棄輜重。仁貴退屯大非川。吐蕃相欽陵將兵四十余万、就擊之、唐兵大敗、死傷略盡。仁貴、待封與阿史那道真並脫身免。與欽陵約和而還。敕大司憲樂彦璋、即軍按其敗狀、械送京師。三人皆免死除名。欽陵祿東贊之子也。與弟贊婆、悉多于、勃論皆有才略。祿東贊卒、欽陵代之。三弟將兵居外、隣國畏之。

甲寅、以左相姜恪為涼州道行軍大總管、以禦吐蕃。

(咸亨三年、六七二年)二月庚午、徙吐谷渾於鄯州浩亶水南。吐谷渾畏吐蕃之強、不安其居。又鄯州地狹、尋徙靈州。以其部落置安樂州、以可汗諾曷鉢為刺史。吐谷渾故地皆入於吐蕃。

『通鑑』は大非川の敗北についての事情も説明している。この前後をめぐる経緯は、筆者がかつて別に解説したので再説しないが、要するに親唐吐谷渾政権の諾曷鉢一党が、吐谷渾の旧領、青海の西岸伏俟城を含めてその南

西部を、吐蕃とその配下になつた吐谷渾から奪回して貰うために、唐軍に要請してその全面的出動に漕ぎつけたのである。しかし、唐軍は大非川をめぐる戦闘で完全に敗北して、薛仁貴を頭とする三人の將軍が、ガル・トンツェンの長子ガル・ティンデイン (mGar Khri bñ 欽陵) と和を約して逃げかえり、三人共死は免れたものの名譽を剥奪された。その結果、親唐吐谷渾政權は故地に還る可能性を全く失つて、靈州近くに拠り、その部落は安樂州と名づけられ、諾曷鉢はその刺史となつて終つたといふのである。

この戦闘は、青海南部の今日の大河壩水(=大非川)の周辺で行われたものであり、敦煌出土の吐蕃王朝『編年紀』では六六八年の条に、

チマクル (ji na khol) に砦を築いて一年が過ぎた (DTH, p. 14)。

とあり、六七〇年の条に、

チマクルにシナ軍を多数うち殞して一年が過ぎた (*bid.*)。

とあつて、直前の六六七年にガル・トンツェンの死が伝えられ、その前後に彼による吐蕃配下の吐谷渾に対する工作の様子が伝えられている。このチマクルとはチマ川の意味で、大河壩水上流の今日のチェマル山 (Che mar)、チェマルタン (Che mar thang) 附近を指すと考えられる。この点についても、これが西域南道のチエルチェンでありえないこととともにかつて詳述した。⁽²¹⁾

IV

漢文史料を読むと、『赤冊史』の示す時期に、セシンク、即ち薛仁貴十万の軍がガルの長子ティンティンに大非川で敗れたとしか示されていない。この薛仁貴は《邏娑道行軍大總管》に任命されたが、ラサまで軍を進めたのではない。グライ・ラマ五世のいうように二度のラサ侵入があったなどは、勿論のこと、ガル・トンツェン在世時にそのようなことがあったとも漢文史料に全く記されていない。『ギャ・イクツァン』等のいかがわしい要約と訳文の誤りに由来すると思われるが、吐蕃軍の輝かしい勝利は『編年紀』にあるとおりに、ラサ侵入の出鱈目の話を捏ね上げ、存在したくないポタラ宮の炎上にまで筆が及んだところに仏教史家によるチベット史書の問題がある。

この戦を境に吐谷渾は名実ともに吐蕃に併合された。尤も唐はこれを公認したわけではないが、青海の南部にあった吐谷渾の故地は實際上吐蕃の手におちた。唐がそれを公認するのは金城公主の入蔵以後であり、七三一年に至って赤嶺日月山に境界碑を立てている。赤嶺が青海の南東端にあることは周知のことである。境界碑には日月の照覽を乞うため日月の模様が入っていたから、チベットでもこの山の峠を《日月石碑峠 (rDo nyi zia la)》と呼んでいる。

『赤冊史』は、戦争の原因をチベットが《ユグル国をすべて取ったので》としている。ユグルは勿論ウイグルの意味であろう。『赤冊史』も『王統明示鏡』も、ともに吐谷渾を *thu lu hun* と写し、《*thu lu hun hor ser yin*》⁽²²⁾ とか

《hor ser thu lu hun》⁽²⁴⁾と書いている。Hor serがウイグルであることについては今更議論を要しないであろう。

こゝで吐谷渾つまり《Thu yu hun》を《Thu lu hun》と書き写したのは、『ギャ・イクツァン』以後における誤写であり、『yu』と『lu』とはチベット文字において極めて近い字体であることと、『吐谷渾』の名を知らないので、吐魯番の地名を媒介として《Thu lu hun》からHor serをひき出したものと想像される。『赤冊史』も『王統明示鏡』もこの《Thu lu hun》が《'A zha》⁽²⁶⁾と同じものであることを全く知らなかったのでこの始末となったのである。

他方、『王統明示鏡』が《シナの史書にある》と注記した記事は、『学者の宴』の文の素材ともなっているが、残念ながら『唐書』にも『通鑑』にもない。唐軍がラサに至っていないのであるから、勿論そのようなシナの史書の記事にはありえない。

『王統明示鏡』のみに見えてなお問題となる記事の要素は次の二つから成っている。一つはポタラ宮炎上、他は釈迦牟尼像秘匿である。第一の点について、『学者の宴』は Khri tse dhar po の名を出している。この書の著者は、ポタラにあったとされる宮殿をこの名で言及する。従ってポタラ宮とされているのに等しい。

後代の史書一般にポタラ宮はマルポリ山にあったとされる。したがって、マルポリとして言及されているのも同義で用いられているとしてよいであろう。しかし、かつて拙論「七世紀前半の吐蕃とネパール」で述べたように、ソンツェン・ガムボ王の都城はヤルルンにあって、ラサは夏の住地 (dyar sa) であり、ラモチェとトゥルナは別として、マルポリ山にポタラ宮があったと示す史料はなく、その根拠になっているネパール王女の築城は、

ヤルンで行われたものではないかとしたが、この考え方は今も変えていない。その時示したように、マルポ (dmar po) は「下方の」を示す《dmar ba》に由来し、「頂の」の《rtse》に対するものであった。それを「マルポ」と誤り読んで、今日の「マルポリ山」に附会したのである。従って、この山に初めから宮殿などはなかったのである。かつてあったことがなかったから、古くに破壊されたものと伝えられるに至ったのであろう。

第二の点は仏教徒としての創作である。

ラサのトゥルナン ('Phrul sang)'、別名チョカン (Jo bo khang 大招寺) には、数体の仏像がある。梅檀から自然に出来たという像を内蔵し、そこにソんツェン王夫妻三人が消えたとされる十一面観音像と、彌勒、阿彌陀仏、それに問題の仏陀十二歳時御丈をもつ釈迦牟尼仏の金銅像である。⁽²⁸⁾ 最後のものが金城公主によって中央仏堂 gTsang khang dbu ma に安置されたものとされている。右のうち『王統明示鏡』には、仏陀十二歳時御丈の像の代りに、後にラモチエに入れ替えて移されたとされる八歳時御丈の阿閼金剛像があるとされている。⁽²⁹⁾

この文成公主将来の仏像は、入蔵の際に車の上に載せてもたらされたものと『王統明示鏡』は述べている。⁽³⁰⁾ しかも、極めて由緒のあるものであるとして、その点をいうためにインド由来説と、唐軍に持ち去られる怖れがあったのでチョカンに秘匿されたという話を伝えているのである。

《唐軍に持ち去られる怖れ》については、既に見たように、唐軍侵入の事実はなく、唐軍が如何に貴重とはいえ、仏像一体を奪取するために軍を繰り出すという可能性も歴史的にはありえなかった。このような発想自体はチベット人仏教史家からしか出てこないのである。従って、秘匿の事実そのものが歴史的には考えられなくなる。イ

ンド由来説の眞偽についても、辿れば辿る程、肯定的な要素が失われてしまつのである。

V

仏像秘匿説の発想が何に由来しているかという点を次に考えてみたい。

プトゥンはその『仏教史』のうちに、

その御子ジャン (Jang) の外孫ラウン (Iha don) にシナ王の息女金城公主が娶られたが、子 (ラウン) が死んだので、祖父 (ラウンの父) と結婚して (ラウンのために) 釈迦牟尼像を求めて礼拝供養したのである (SRD, f. 119b⁴⁻⁵, Vol. Ya. f. 125a⁵⁻⁶)。

としている。この記述に示される人物関係は、《祖父》という用語も含めて考察すると、敦煌史料の記事などから、クンソン・グンツェン王の結婚、ソンツェン・ガムボ王の再婚が誤伝されたのでなければありえない内容になっている。この点は、かつて詳しく論証したとおりである⁽³¹⁾。従って、この文中の《釈迦牟尼像を求めて (Iha Sh akya mu ne btsal te)》とあるのは、決して後段で見るように《トウルナンにあった仏像を再発見して》という意味ではなく、《唐の国から取り寄せて》の意味であったと考えなくてはならない。

プトゥンは右の引用文に先立って、文成公主がネパール王女と共に、ソンツェン・ガムボの死に際して、揃って観音像中に消えたという伝説を紹介し、その際の文成公主の遺言として、

釈迦牟尼像をラモチェ寺からトウルナン寺の張り出し部屋に移し、戸口に壁を塗って、上に文殊像を画け

(SRD, f. 119b^{v-2}; Vol. Ya. f. 125a^v)。

とあった旨を云う。しかし、ここには唐軍侵入のおそれも、事実も全く触れられていない。《戸口に壁を塗った》理由も、扉を泥で閉じたという意味に必ずしも取る必要はなく、公主の信奉するシナ仏教を象徴するように文殊像を壁画にとどめる為であったという意味にとつてよい。

先に引用したプトウンの文も、右の文のあとにあるが、前文を受けて同一の釈迦牟尼仏像であるという含みで示されてはいない。しかし、ソンツェン・ガムボ再婚記事がそこに誤伝されているのを知らない場合、プトウンの記述の順に従えば、これら二つの釈迦牟尼仏像は簡単に同一のものとみなされ、誰でも、《トゥルナンにあるものが再発見された》という意味で、その仏像を《探し求めて》と読むに違いない。

『王統明示鏡』は事実そのようにつじつまを合せて次のように云っている。

(金城) 公主は、チベットにつくと、口を開いて「私のおばの寺を見よう」といってラモチエ寺に至ったが、そこには釈迦牟尼像はなくなっていた。後、トゥルナン寺に至った時、釈迦牟尼像が、鏡のついた南門にましますと知って、扉を開いて釈迦牟尼仏像をそこからとり出し、仏殿中央に安置申し上げた。三代の間、閨の部屋にましました釈迦牟尼像に対し、シナ女(公主)によって拝観供養が始められたのであった (GSM, f. 83b^{v-2}; L. f. 78b6—f. 79a1)。

右の文によっても、壁に塗りこめられて、上に文殊像が画かれていたとまでは書いていない。トゥルナン寺に移されていたが、漢土由来の仏像であったから礼拝されないまま顧みられなかったのを、金城公主が、自国由来の

仏像に愛着を示して、礼拝したというのでもあろうか。文成公主のもたらした仏像が、初めラモチェ寺に安置されていたが、トゥルナン寺が出来ると、規模の大きなこの方の寺に安置されたのである。プトウンによると、

大臣達は(トゥルナンとラモチェの)二つの仏像を交換して遺言どおりにした(SRD, f.119^v; Vol. Ya. f. 125a^v)とある。二仏像を入れかえたのであり、一仏像を隠したとは云っていない。勿論、文成公主はこの後も生きつづけて、六八〇年に歿していることは周知のとおりである。

万一秘匿されていたのであったとすれば、金城公主が《再発見した》時、何故ラモチェ寺に戻さなかったのかあるかということになるであろう。ラモチェ寺に戻されることなく、今日までチヨカンに安置されているのは、当初からあった筈の他の理由によつた所以を明らかに示している。

『バシエー』によると、隠されていたものを掘り出したとされている。⁽³²⁾これできえも、すたれて打ち捨てられていたのが再興されたとしてもしなければ理に合わない。ここには《鏡のある門》にも《文殊像》にも言及はない。

以上の考察からプトウンの記述を信憑性のあるものと見るとき、文成公主が、グンソン・グンツェンの死を弔うために、唐から釈迦牟尼像を取り寄せて祀つたという事実があつたものとのみ考えることが出来る。また、その為にラモチェ寺が建立されたとすれば、彼女が再婚する六四六年前後をその建立年次に指定しなくてはならなくなるであろう。事実、『赤冊史』はこの手に釈迦牟尼像がチベットに至つたとして⁽³³⁾いる。

さて、それにもかかわらず、問題の釈迦牟尼像は『王統明示鏡』によると、文成公主がチベットに嫁する時、唐の太宗が彼女に贈ったものとされる。

(唐太宗)の供養札拝する大導師(釈迦)の尊像は、施主にインドラ神自らがなり、素材は十種の宝石から成る。その製作者はヴィシユヴァカルマンがつとめ、仏自身が開眼なさったのである。かくのごとく比類なき勝者のこの像……この像を麗しき人よ、私はお前(公主)につかわそつ(GSM, f. 50a²-4; f. 46a¹-b²)。

と説明されている。また、別の箇所では、太宗の女をソントエン・カムボ王が娶って《十二歳時の御丈の世尊像と大乘の仏法一切をチベットにもたらす》(*ibid.*, f. 37b¹-f. 38a²; L. f. 35a²-4) ことを王自らが予見したとも述べられている。この話は、ネパール王女ティツウンが《八歳時の御丈の世尊像》と共にチベットへ招かれることを予見したとした直後に述べられている。

これらの仏像が極めて貴重であることをいうために『王統明示鏡』は第二章全部を割いて《釈迦牟尼仏の三身の像建立と善住なしたまいし章》をもうけている。そのうちの化身の仏陀の尊像を建立し、善住開眼を世尊がなさったという話の中に、仏陀十二歳時の御丈の尊像がどのようにして出来上ったかを前掲引用文に相応する形で示している。勿論、これは金銅仏として言及されている(*ibid.*, f. 7b¹-6; L. f. 7a¹-b²)。

同じ章の中頃に、仏陀入滅後間もない頃、バラモン三兄弟の末子が仏陀三十歳時の御丈の尊像を梅檀で作らせ

だが、仏師が化身であつて功德無量であつたと述べ、そのあとにこれらの二つの仏像が漢土にもたらされたことによつて漢土に仏教が栄えたと結んでいる⁽³⁴⁾ (*ibid.*, f. 8a^r-f. 10a^r, L. f. 7b^r-9b^r)。

他方、ネパール王女ティツウンのもたらした仏陀八歳時の御丈の金銅仏を、阿闍金剛として迦葉仏の善住開眼したものとのみ述べている (*ibid.*, f. 4a^r-e; f. 38a^r-i) のが注目される。

しかし、参考のためにアティーシャ (Atiṣa 982-1054) の發掘本とされる『カクルマ』(Ka bkol ma) と『トニ・カムブム』を参照してみよう。前者は、パドマサンバヴァ (Padmasambhava) の伝記『トニ・バ・トゥンテン』(mThong ba don lan bstan pa'i sgron me nyi ma 'i dkyil 'khor) の末尾に掲げられている⁽³⁵⁾。

これらには、文成公主のもたらした仏像を『王統明示鏡』のように記述することはなく、ただ単に《導師仏陀が御自ら造らせたそのものであつて (sangs rgyas ston pa'i zhal skyin nyid yin te)》(KKM, f. 438a^e, MKB, f. 206b^e) とのみ示している。

これに対して、ネパール王女がもたらした釈迦牟尼仏像については、『カクルマ』では、

この釈迦牟尼仏像は、インドラ神が施主となり、素材に寶石が用いられ、ヴィシュヴァカルマンが造りあげ、
 仏陀が加持して開眼なされたものである (KKM, f. 432b^e-3^e)。

としている。

また、『マニ・カムブム』でも、

インドラ神の礼拝していた仏八歳時の御丈の釈迦牟尼仏像 (MKB, f. 200b^e)。

とした後、「わが礼拝供養していた釈迦牟尼仏像は」として、以下に前掲『カクルマ』からの引用文とほぼ同じものが示されている (*ibid.*, f. 201a^{r-v})。つまり、ネパール由来の仏像の方が、元来重視、礼讃されていたのである。『マニ・カムブム』は、『カクルマ』を増広した異本とも云える内容のものであるが、『マニ・カムブム』に全くない第二章が『トンバ・トゥンデン』中の『カクルマ』の冒頭に掲げられている。第一章はアティーシャによる発掘由来記であるから問題はない。第二章も前半の内容と一転してはいるが、これから云う造像説話を除けば、序説としてうなずける内容である。

次に一転して述べられる『カクルマ』第二章中の造像説話は、仏陀八歳時の御丈の金銅仏を彌勒が施主となり、ヴィシュヴァカルマンに造らせ、仏陀が開眼したということから始まる。その仏像がめぐりめぐって、マガダにあったという。更に、話が変わって、マガダの国が外道に征服された時、シナに援軍を求めたところ、財貨の援助があり、ベンガル王の救援を得る資とすることが出来た。そのため仏教は復興したが、後にシナの皇帝から仏陀十歳時の御丈の金銅の仏像を求められ、他にも乞われた経典、僧と共にかの国に届けた事 (KKM, f. 414a^o—f. 416a^o) が記されている。

ここでは、十二歳時の御丈の仏像の成立由来はないが、明かに、唐から文成公主がもたらした金銅の仏像を説明するのに補足されたものである⁽³⁸⁾。また、この仏像渡来の話は後段で説明する梅檀像説話等に由来している。八歳時の御丈の仏像を造らせた施主も彌勒となっていて、『カクルマ』『マニ・カムブム』自体が後段でインドラ神を施主とするのとやや異っている。このように、不統一を残しているところから、後代の加筆を疑わせる。

『王統明示鏡』は、『カクルマ』に八歳時の御丈とあつたものを、十二歳時の御丈の仏像に入れ替えて由来を説明し、さらに、三十歳時御丈の栴檀像を加えて、ネパール系釈迦牟尼像を、既に見たように別に示して迦葉仏の開眼とし、それよりも文成公主将来の釈迦牟尼仏像の礼讃に重きを置いているのである。

VII

『カクルマ』が十二歳時御丈の仏像についていったところとほぼ同様の趣きが、くわしく『王統明示鏡』のうちに云われている。それによると、

インド王(タルマパラ)と漢土の王(ティティマザヤ *sprī si ma dza ya*)の間にまだ会つたことのない交際が続いたのであつた。……そこで手紙が一通届けられ、次のようにいわれたのであつた。「……我等辺境漢土の王たる私に勝者(仏)の御言葉(経)なく、導師(仏)の像がなく、わが国には法の機会がないので、汝は私に世尊の御像十二歳時の御丈のものと、五時教と四方僧伽の一揃いを愍みをもってわれらに「下されたい」(GSM, f. 9a³—b²; L. f. 8b⁵—9a²)。

とあつたので返書をつけて、

それから大きい筏をつくつて、その上に釈迦牟尼仏像と三宝をおすえ申しあげ、筏の上に絹と宝石のテントを張り、樂を奏し、旗を立てるなど限りなくして、インドから漢土に赴く大河(*chu chen mo*)があつたのでそこに筏を送り出した(*ibid.*, f. 9b⁵—f. 10a¹; L. f. 9a⁴—s⁵)。

とある。手紙の中にも、その仏像はインドラ神が施主であつてヴィシュヴァカルマンが造り、仏が御自ら開眼なさつたと繰りかえしている。ただ、このやりとりに見える仏像は一躰のみであつて、八歳、十二歳、三十歳いずれとも示されていない。また、金銅仏とも梅檀仏ともされていない。

しかし、次の章の冒頭に、

それから釈迦牟尼仏像と梅檀仏とが漢土にお着きになつた後、漢土にどのように仏教が広まつたかを思つながら、漢土の大史書の王統記では、漢土の王の最初は周王 (Boi'en) と呼ばれる (*ibid.*, f. 10a²⁻³; L. f. 9b²⁻³)。

として、運ばれた仏像を二体とし、続けて漢土の王統を述べている。これらの王統は、『赤冊史』の記述にそつているが、いずれも記述が粗雑で人物を特定することは出来ない。文字通りにいうと、『その後、トゥンツイン (Dung tsing) の弟セチェン (Se chen) が王位につきて』とした後に割注があつて、

プトゥン『仏教史』にティティマ王 (S'pri'si'ma) といわれるものがあつてそれに相應する (don'thun) マン
を仰云つてゐる (*ibid.*, f. 10b⁴; L. f. 10a⁴)。

とある。この『セチェン』は『赤冊史』ではカイツイン (Gai'tsing) (HLD, p. 7a³; P. p. 13²⁻⁴) となつてゐる。⁽³⁹⁾ ただ、この文に相應する内容はプトゥン『仏教史』にまだ見出せない。

『王統明示鏡』は続けて、今度は本文として、

この時に釈迦牟尼像と梅檀仏像の二つが漢土においでになり、以後正法が広まつたとシナの文献にいわれて
ゐる (GSM, f. 10b⁴; L. f. 10a⁴)。

という。ここにも仏像が二体となっている。この点は、『新赤冊史』ではさすがに気になったとみえて、『王統明示鏡』に二体とされていて矛盾がないとしながらも、むしろ梅檀仏の方の存在を疑っているかのよう⁽⁴⁰⁾に示している。勿論、『王統明示鏡』は間違ったのでなく、二体とすることによって文成公主がチベットに将来した仏像をその一つに数えたのである。

『赤冊史』は『ギヤイクソファン』を用いていることでは、『王統明示鏡』に先がけているが、それを見ると、漢土に運ばれたとされる仏像は一体のみである。ここでは、次のように述べられている。

カイツイン王の時に、或るインドの老パンディタが王に対して、インドとジャン(雲南)国のある小王国に、昔釈迦牟尼仏が三十三天にお出かけになった時造られた仏十二歳時の御丈の釈迦牟尼像と、仏の遺体(の一部)とクマラシュリーと呼ばれる学問のあるパンディタがいるが、ここでは王国が小さくて有情の利益が増えない。汝は軍を派遣して(それらを)持ちかえれば、多くの有情のために大いに役立つであろうといったので (HLD, p. 7a³⁻⁶; P. p. 13¹⁵⁻²¹)

王はこの忠告に従って、將軍に兵を伴わせてその地に至らせたところ、その地の王が何を望むかと尋ねたので、《釈迦牟尼仏像と仏の遺体とパンディタ》が欲しいと答えた。しかし、目あてのパンディタが既に死んでいた⁽⁴¹⁾ので、その子《クマラチュンバ (Ku ma ra chung ba 鳩摩羅什)》と他の二つをもち帰った。將軍が王の前に赴こうとしていた時に王が歿した。この王の系統が絶え、王の宰相が国を立てたと聞いて、將軍も勢力をまとめて別に国を立てた。後に至って、將軍の王統の手もとから宰相の王系のものが釈迦牟尼像や仏の遺体、パンディタを

取り戻してこれらを丁重に扱った (HLD, p. 7a⁶—p.p. 13²¹—p. 15⁹) と続けられる。この記述では『王統明示鏡』や『カクルマ』とは様子が異って侵略的であり、『王統明示鏡』のように海路から至ったと云わない。しかし、ここではこの仏像を十二歳時御丈とのみ云って梅檀像とはしていない。

VIII

これに先立って『赤冊史』はこの釈迦牟尼仏像の由来記を掲げている。この方は『王統明示鏡』や『カクルマ』の示すものと全く異っている。

その後ウタヤナ王 (Urayana) が目蓮にすすめ、彼 (目蓮) が神の国において世尊の像を梅檀でつくり、人の国にもたらした。世尊が神の国より降られた時、その梅檀像がお立ちになって世尊に低頭したので (世尊が) その頭に手を置いて、わが涅槃の後千年を経た時、この像はシナの国において有情の利益をなすであろうと予言なされた (HLD, p. 6a⁷—b; P.p. 11¹⁴—19)。

つまり、ここでは単に梅檀釈迦牟尼仏像といふことになって、『王統明示鏡』のいうような三十歳時の御丈の梅檀像⁽⁴¹⁾でもなく、十二歳時の御丈の金銅仏でもない。

この話について『赤冊史』は、引き続き述べるところに、『漢土の梅檀釈迦像の物語』(Gya'i tsan dan jo bo 'i lo rgyus) (ibid., p. 6b³; P.p. 12⁴) と称し、この話をチベット語に訳した人物を、チュシエン、(Chos rje pa) の弟子でチャン、⁽⁴²⁾チヤン (Byang ngo (dgon)) の住持ラマ・シエー (ラブ・) イエ (シエー) (Shes rab ye shes) と示してい

る (*ibid.*, p. 65⁴⁻⁵; P.p. 12⁶⁻⁸)

この物語りにについては、既にミジエル・スワヒエ M. Soyminé 氏の優れた研究があつて、原型として『大唐西域記』巻五、憍賞彌國(大正、五一巻、二〇八七、八九八頁上)中の記述をあげ、さらに『高僧法顯伝』(大正、五一巻、二〇八五、八六〇頁中)中にも同類の説が示されていることなどを注記⁽⁴³⁾している。

また、発展した形の『漢土の梅檀釈迦像の物語』⁽⁴⁴⁾に関しては若松寛氏の研究があつて、グンポ・キャブ (mGon po skyabs) とチャンキャ・ルルパー・ドルジエ (Icang skya Rol pa'i rdo rje 1716—86) による二つの報告のうちの後者によるモンゴル文テキストの方を取り上げている。そのもとになつた元の程鉅夫による『雲棲集』巻九の「梅檀仏像記」や、それに多く拠つている康熙御製の「梅檀仏西采歴代伝祝記」等が、関係の研究と共に紹介されている。

これらの研究を参照すると、『赤冊史』の文は『雲棲集』中の当該文に由来することを確認できる。人物関係の他に、『西域記』では《刻檀之像起迎^ニ世尊^ニ。世尊慰曰「教化勞耶。開^ニ導末世^ニ寔此為^レ冀^ニ》としかないところが、『雲棲集』では《此像躬迎、低頭問訊、仏為摩頂授記「我滅度千年之後、女往^ニ震旦^ニ、広利^ニ人天^ニ》と発展した形になつており、いずれも檀像の大きさを云わないが、『赤冊史』は後者に平行しているのを知る⁽⁴⁵⁾。他方、『王統明示鏡』に関しては『仏祖統記』巻三七にある次の話が比較されねばならない。

(天監)十年中天竺釈迦檀像至。帝率^ニ百僚^ニ迎入^ニ太極殿^ニ。建^レ齋度^レ人、大赦断^レ殺。挂^レ是弓刀並作^ニ蓮華塔形^ニ。初郝騫、謝文華等八十人、応^レ詔西行求^レ像。至^ニ舍衛國^ニ。從^レ王請^レ像。王曰「此中天正像、不^レ可^レ適^レ辺。乃

令三十二匠更刻紫檀、人_一相、卯時運_レ手、午時己就。頂放_二光明_一、降_二霽香雨_一。鶯負_レ像東還、乃渡_二大海_一……

右文中の《帝》は梁の高祖武帝である。

《令三十二匠更刻紫檀》は『雲樓集』中の「梅檀仏像記」に《躬攝三十二匠升_二天_一、審諦三返》とあるのに類似している。しかし、スワミエ氏の研究によると、スタイン文献 S.2113V¹ の三二―二五行に

仏在天又玉思欲見、乃令目健連日（||與）三十二匠往来天_一、令匠取各（||各取？）一相……………とあり、さらに、二九―三〇行にも

大目健連已（||以）神通力 将三十二匠往天、各貌如来一相。

とあるので、表現の由来は九世紀⁴⁶まで遡らせることが出来る。

既に見たように『王統明示鏡』は、『仏祖統紀』にあるように穏やかな交渉と水路によるインドから漢土への將來をいう。これらの点は『赤冊史』に伝えられるものと異っている。従って、『雲樓集』系とは別に『仏祖統紀』系の訳文もチベットに伝えられていたと見なければならぬ。このことから、『王統明示鏡』にいわゆる漢土の王ティティマザヤ (spri tu ma dza ya) を字形からみて《Wu tu sai u yan》つまり、武帝蕭衍の誤伝と見ることが出来る⁴⁷のである。

『仏祖統紀』の話は、三十二匠によって仏（の三十二相）の各相を写させたという表現を除けば、ほぼ史実に近いであろう。そこから『雲樓集』中の檀像のように龜茲・涼州をめぐる長安に至ったという話になるには、

スワミエ氏の紹介するような僞賞彌、または舍衛国から于闐国に仏像が飛来したという説話があつたの(48)に加えて、梁の武帝一代のうちに扶南国から栴檀仏像や珊瑚仏像、さらに仏髪が献じられたことと、真諦三蔵がそこから漢土に招かれたことがまとめられて一連の話の内容とされた上で、于闐国から玉刻仏像が献じられたことも加わつて、鳩摩羅汁が長安に至るまでの話と混同された(49)ことが充分吟味されねばならない。

鳩摩羅汁については、周知のとおりの話があるが、時代は梁の武帝より遡る。即ち、前秦王の世祖符堅が龜茲等に軍を遣わした際、將軍呂光が羅什を擒にして、符堅の歿後、西北地方に後涼を建て太祖武帝を称したが、羅什を充分用いなかった。後に、後秦を建てた高祖姚興が後涼を滅して羅什を長安に迎えたのである。(50)

ここにも高祖や武帝の名があつて、梁の高祖武帝の事蹟と混同され易い要素が多い。『赤冊史』の《カイツイン》は《高祖》を写したもので崩れた形であり、『王統明示鏡』の《セチェン》は《世祖》に由来するのであろう。勿論、元のフビライとは関係がない。(51)

鳩摩羅什に関する三代にわたる王の名称がどこかで梁の《高祖武帝》と混同され、符堅以降の三代にわたる話には羅什の招待しか語られていないのに、そこへ『赤冊史』で見られるように、武帝蕭衍の三つの事蹟が持ちこまれたのである。また、その結果、『雲樓集』中の記述では三つのうちの一つに数えられていた《栴檀仏》も、インドから直接漢土にすることが出来なくなつて、羅什のコースどおり、龜茲・涼州・長安というようにまわり道を余儀なくされたのである。『赤冊史』では、梁の武帝の事蹟が、これら三代にわたる史実と混同されたことを歴然と示すためであるかのように《檀像》や《仏髪》を献じた《扶南国》の名残りを見せて、目的地が《龜茲》で

はなく《インドとジャンの間にある小王国》⁽⁵²⁾となっているのである。

『雲棲集』による限り、将来された仏像は檀像であるが、『赤冊史』はそれを十二歳時御丈のものとのみいう。この点で『赤冊史』にも既にある種の意向が反映していたといえよう。前者によれば、金銅仏ではないからチベットには至るわけがない。事実《シナの文献》によれば、『雲棲集』の書かれた十四世紀中でも檀像は漢土にあってとされるのである。

勿論、三十歳時御丈の梅檀仏と十二歳時御丈の金銅仏の二体が同時に搬入された跡は漢文史料中に見られない。『王統明示鏡』のいうところを《シナの文献》に敢えて求めるならば、于闐国から玉刻仏像が、紫檀模刻像のもたらされた天監十年でなく、大同十年に将来されている。この仏像を、《優填王》所作の仏像が同じ天監十年に漢土に伝えられたと誤り取ったのであろうか。⁽⁵³⁾

『仏祖統記』と同系の話は、十六羅漢を漢土に招いた由来として十一世紀頃既にチベットでも知られていたのであるから、『王統明示鏡』の二仏像同時渡来の話を《シナの文献に云われている》として主張しても、チベットの史家にとっては歪曲として咎めだてされる理由にはならないかも知れない。

「梅檀仏像記」の梅檀像も、チヨカンの釈迦牟尼仏十二歳時御丈の金銅仏も、コートンにある檀像も歴史的由緒は別にあろう。『王統明示鏡』の掲げる《縁起》は、『仏祖統記』にある梁の武帝が紫檀模刻像をもたらしたとする一事にかなりの部分が依存している。同じ記事は十六羅漢の漢土招請説話にも基盤を提供してグルマターラ居士を創り出した。他方、唐軍によるラサ侵入、ポタラ宮炎上説は右の《縁起》を権威づけるために創作されたの

である。無稽な語彙は、*しんせむひまなへ*、信者に無用のことである。

智学集

DMS: pan chen bSod nams grags pa. *Deb ther dmar po'*

i deb gsar ma, 1538 (G, Tucci: *Deb ther dmar po gsar ma*, Roma 1971) 103 fols. 『雑学集』

DTN: ' Gos lo tsā ba gZhon nu dpai: *Deb ther sngon po*, 1476, Ed. Kun bde gling. 『智学集』

GSM: bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan: *rGyal rabs rnamts kyi 'byung tsul gsal ba'i me long chos 'byung*, 1368, Ed. sDe dge, 104 fols; (B.

I.Kuznetsov: *rGyal rabs gsal ba'i me long*, Leiden 1966) Ed.Lhasa (藏中L.), 101 fols 『雜学集』

HLD: Kun dga' rdo rje: *Hu lan deb ther*, 1346, Gangtok 1961, 40 fols; *Deb ther dmar po*, 早晚 (藏中P.) 1981, 151 pp. 『杂学集』

HTK: Ngag dbang blo gzung rgya mtsho: *IHa ldan sprul pa'i gtsug lag khang gri dkar chags shel dkar me long*, 1645, Ed.Lhasa, 21 fols.

KGG: dPa bo gTsong lag 'phreng ba: *mkhas pa'i dga'* *ston*, chapt.1a, 1545, Ed.IHo brag, 155 fols. 『杂学集』

KKM: *U rgyan gu ru rin po che'i rnam thar mthong ba*

don ldan bstan pa'i sgron me nyi ma'i dkyil 'khor (Paal ma bka'i thang yig ga'u ma) vol. II Dalhousie 1981, 458 fols. (rGyal rabs ka bkol ma ff. 407a—456b) 『カムニ』

MKB: *Mnyi bka' 'bum glegs bam dang po*, Ed. Lhasa, 377 fols (Chos skyong ba'i rgyal po Strong btsan sgam po mdzad pa rnam thar, ff. 222a—247b) 『ブニ』

41

MKB II: *Chos skyong ba'i rgyal po Strong btsan sgam po'i bka' 'bum las smad kyi cha zhal gdams kyi bskor* Ed. Lhasa, 331 fols (rGyal po yab yun thugs kar thim lugs, ff. 303b—309b)

ZhG: Ngag dbang blo bzang rgya mtsho: *rDzogs ldan gshon mu'i dga' ston dpyid kyi rgyal mo'i klu dbyangs*, 1643, Ed. Lhasa (早晚, 1957, reprint 1980) 『カト』

SRD: Bu ston Rin chen grub: *Chos kyi 'byung gsum rgyab rin po che'i mdzad*, 1322, Ed. sDe dge, 202 fols; Ed. Lhasa, Vol Ya, 121 fols. 『カト』

「七吐ネ」拙論「七世紀前半の吐蕃とネパールの関係」(『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』第2・第3号、1978, pp. 29—57)。

『吐成研』拙著「吐蕃王国成立史研究」東京、1983年。
「虎十來」拙論「虎を伴う第十八羅漢図の来歴」(『インド古典研究』第6巻・成田山新勝寺 1984, pp. 393—420)。

註

(1) 十一世紀の人物と思われるルメー・ドムチェン *Klunmes 'brom chung* と漢文史料を用いた様子が窺われる。
「虎十來」四〇四—四〇九頁参照。

(2) 『吐成研』五二—五一六頁、五四三—五六二頁参照。

(3) 略号表「虎十來」参照。

(4) 略号表 KGG 参照。

(5) このような事実はないが、ガル・トンツェン・ユル *mnGar strong bisan yul zung* が唐に抑留された時、計略を用いて脱出し、恨みを返すために数々の悪事を為して去ったと『王統明示鏡』(GSM. f. 51a⁺—f. 53a⁺; L. f. 47b⁺—f. 49b⁺) や『トニ・カムナム』(MKB. Vol. E. f. 210a⁺—f. 212b⁺) に示されている。これも一つの誤伝であり、ガルは、公主が入蔵して、唐側の使節の帰国した後、贈位にあって帰国している(『吐成研』三七三—三

七六頁、四三五—四三八頁、六〇四—六〇五頁参照)。

(6) 略号表 DTN 参照。

(7) 二一年後の意味。拙論「チベット史料の年次計算法」(『東洋学報』六三—三・四号、一四一—一六八頁) 一五〇—一六二頁参照。

(8) 略号表 GSM 参照。『王統明示鏡』は史実を含むが物語的要素もまた多い。「フウラン・テプテル」やプトウンの仏教史と共に十四世紀の史書で、チベット史の基本史料となっている(『吐成研』七三—七八頁参照)が、本論で見られるように問題が多い。

(9) *joms* は歴史的現在形、能動的意味を強調する。

(10) 「門」《sgo》には「門」の意味と「扉」「戸」の意味がある。「扉」「戸」の意味にとると塗りこめた意味が出てくる。

(11) 本文九頁参照。

(12) 略号表 HLD 参照。

(13) 『吐成研』三九〇頁参照。略号表 SRD 参照。

(14) 略号表 ZHG 参照。

(15) 略号表 DMS 参照。

(16) もっとも、ソナム・タクパが仏教はソンツェン・ガムボの時に始まったとしたのを非難している (ZHG. f. 29b¹)。

- (17) *dPag bcam yon bzang*, 1748, 317 fols, f. 97b^{v-5}
- (18) 稻葉正就・佐藤長『フワン・テプテル』京都、昭和三十九年、一一―一四頁参照。本論で扱った部分については、佐藤長氏は六八頁注一五二・一五三におおつて、「エグル」はウイグルを指すが、なお、西突厥の勢力範囲であった旨を述べ、〈ラサに到達した〉というのは誤りである〉と述べている。
- (19) *Kun bzang stobs rgyal rGya bod yig tshang mkhas ba dga' byed*, Vol. I, 1434, 218 fols, f. 71b^v—f. 81b^v前記注(16)の『フワン・テプテル』序二二―二三頁参照。但し、『ギャプー・イクソァン』の記述は『フワン・テプテル』より簡略であり、かなり遅れて成立しているばかりか疎漏が多い。従つて、『フワン・テプテル』の写本によつた可能性が大きい。
- (20) 『吐成研』六八九―六九四頁参照。
- (21) 上掲書六九三頁、七三六―七三七頁、注二二四参照。
- (22) 註(18)参照。
- (23) 吐谷渾を *Thu lu hun* と呼んだことは HLD. p. 9a¹⁻³, P. p. 17¹⁵—p. 18² の記述が、『唐書』等と相応してゐるので明かである。ただ *Thu lu hun* と *Yu gur* の異同は示してゐない。HLD. p. 12a⁵ (*thu lu hun/thu lu hun*), P. p. 24⁸.
- (24) GSM. f. 95a⁵, L. f. 90b⁷, r. r. j. j. j. Yu gur と呼ばない。
- (25) R. A. Stein: *Recherches sur l'Épopée et le Bonde au Tibet*, Paris 1959, p. 173, n. 52. なお、単なる《ホル》がウイグルを指すか否かについては森安孝夫「チベット語史料に現われる北方民族」(『アジア・アフリカ言語文化研究』十四、一―四八頁)三三四頁 a 一四六頁 a 参照。
- (26) 『吐成研』六五〇―六五二頁参照。
- (27) 「七吐ネ」四四―四八頁、『吐成研』七六五―七七二頁参照。ソントゥエン・カムボがヤルルのチンバ(Phying ba)に都を置いていたことは前掲拙著三六〇頁参照。なお、ティドワソン (Khri 'dus strong, 676—704) がガル氏を滅した時、ガル氏と吐蕃王家の比較にも、後者はヤルルのチンバに指定されている。前掲拙著四五〇―四五二頁、注一八参照。
- (28) HTK, f. 5a—f. 11a. 『赤冊史』には阿弥陀仏の代りに、梅檀ターラがあつたと述べたこと(HLD. P. p. 35^{v-11})。
- (29) GSM. f. 55b³—f. 56a¹; L. f. 61b⁵—f. 62a², HTK. f. 17a⁵—b².
- (30) GSM. f. 51a¹, f. 56b⁵⁻⁶, f. 57a⁵, L. f. 47a⁵, f. 52b⁷, f. 53a⁵.
- (31) 『吐成研』五五六―五六一、五七四―五七五頁参照。

註(33)参照。

(32) KGG, f. 72a⁵⁻⁶, R. A. Stein: *sBa-bzed*, Paris 1961, p. 39¹⁻¹³; *sBa gSal snang: sBa bzhed*, 北京 1980, pp. 3—

4.

(33) 『赤冊史』はソンツェン・ガムポ王の歿年を敦煌文獻と同じく「土」と西「(六四九)」と伝える (HLD, p. 174, p. p. 367⁸ は誤って *sa mo byi* と伝えるが、*sa mo* なら *bya* である) 点で注目されるが、今、問題の仏像がチベットに入った年を六四六年相当の年に示している(「釈迦牟尼像がチベットに至った。その時から今(一三三六六年)まで七〇〇年になる」HLD, p. 86⁸, p. p. 176⁷)。この年、文成公主は亡夫の父ソンツェン・ガムポと再婚した。公主には一子マンルンがいたので、その《祖父》と結婚したといわれる。この年亡夫の喪があげたのである。『吐成研』五七六—六四八頁参照。

(34) ここでもインドラ神が施主、ウイシユヴァカルマンが仏師となって出来た十二歳時御丈の金銅仏像を仏陀が開眼し、神々の国、ウッディヤナからブツダガヤの金剛座へとめぐって、仏陀三十歳時御丈の栴檀仏像と共にあつたとされている。《三十歳時の御丈》という解説はどのような史料にも出てこない。『赤冊史』によると、仏陀が三十八才の時三十三天にましました折のこととなつてい

る (HLD, p. 6a7¹⁻², p. p. 114¹⁻²⁰)。ただ、ガントク版は「正覺を三十五歳とし、三か月後にトソツ天に赴いた」とするが、北京新版は《三十歳正覺の後八年》としている。

(35) 略号表 KKM 参照。

(36) 略号表 MKB, MKB II 参照。

(37) 『カクルマ』を収めた「トンバ・トウンデン」については金子英一氏の教示を得て、テキストも手に出来た。記して謝した。

(38) 十二歳時御丈の仏像が『赤冊史』では栴檀仏となっているが、ここでは金銅仏となっているからである。ただ、栴檀仏をこれとは別に説くまでには至っていない。

(39) *Se chen* というのは、チベットでは元の世祖フビライを指す。*Se chen* が《世祖》を写した訛りであれば、*Gai tsing* は《高祖》に由来し、それぞれ、前秦の符堅、後秦の姚興に由来すると見ることが出来る。

(40) DMS, f. 35b¹⁻⁵, T, f. 43b²—f. 44a² には王の名も *bsi tsing* となっているが、その王の時、栴檀仏を取るのに(兵が)派遣され、この王が歿した後、宰相と將軍が別個に国を建て、宰相系の王が將軍系の王から栴檀仏を奪って供養したとして、仏の遺物や僧には触れていない。そのあとで『王統明示鏡』には栴檀仏と釈迦牟尼像の二つが *bsi tsing* 王の時に至ったと説明されているので矛盾は

ない。この梅檀仏が今漢土のどこにましますという話があつたと誰も聞いていない。お着きになつたとの話は「仏涅槃後千年を経てこの像が漢土の有情に利益をなす」との予言よつてのみ知られている」としてゐる。また、「王統明示鏡」のように平和的でもなく、水路による到来をいうものでもない。その点では「赤冊史」に従つてゐるといえよう。梅檀仏のみについて三代にわたる王の事蹟をいう点は「赤冊史」と異り、むしろ「雲棲集」寄りになつてゐる。本文二七頁参照。

(41) 『赤冊史』によると、この檀像についで予言をした時、仏陀は三十八歳であつたとされてゐる (HLD. p. 6b², p. p. 11²⁰)。

(42) チャン²。寺は、サキヤ・パンディタ (Saskya Pandita 1182-1251) が闍瑞王に召喚されて西涼に赴く折に建立したとされてゐる (HLD. p. 218, n. 97)。

(43) M. Soyumié: "Quelques représentations de statues miraculeuses dans les grottes de Touen-houang" (*Contributions aux études de Touen-houang*, Vol. III, EFEO [Paris] 1984, pp. 77-102) pp. 99-100.
今『西域記』巻第五中の関係箇所を示す。

城内故宮中有大精舍。高六十余尺。有刻檀仏像。

上懸石蓋。鄔陀衍那王唐言出愛 舊云優瑛王訛也之所作也。靈相間起。神光時照。諸国君王恃力欲^レ拳。雖多^レ人衆。莫能^レ轉移。遂圖供養。俱言^レ得^レ眞。語^レ其源迹。即此像。初如來成^レ正覺已。上昇天宮。為^レ母說法。三月不^レ還。其王思慕。願^レ圖^レ形像。乃請^レ尊者沒特伽羅子。以^レ神通力^レ接^レ工人。上天宮。親觀^レ妙相。雕^レ刻梅檀。如來自^レ天宮^レ還也。刻檀之像起迎^レ世尊。世尊慰曰。教化勞耶。開^レ導末世^レ寔此為^レ冀。

(44) 若松寛「康熙御製梅檀仏西來歴代伝祝記と章嘉呼図克圖」(『宋元代の社会と宗教の総合的研究』一九八〇、四三—五二頁)。なお、モンゴル人の間にある檀像伝説については『蒙古源流』に記載があることと、そのモンゴル文テキストからの訳文を岡田英弘氏から詳細に教示して貰つた。その内容は「赤冊史」とほぼ一致してゐる。記して謝したい。

(45) 前掲若松論文四六頁参照。《震旦》がシナを指すことはさうでもない。

(46) 前掲スワミエ論文九九—一〇〇頁参照。スタイン文献の成立年次については藤枝晃「敦煌千仏洞の中興」(『東方学報』三五、一九六四、九—一三九頁)をとつてゐる。スワミエ論文八二頁参照。

(47) チベット文字の《wu》と《sri》とは、後者が《sra》ならば簡単に誤られる。《ma dza ya》《mdza ya》であれば、《sa'u yan》に近い表音である。

(48) 前掲スワミエ論文八七、九一―九二頁参照。

(49) 「虎十来」四一九頁、注五八参照。本論文註(52)参照。

(50) 本文二二頁参照。

(51) 註(39)参照。

(52) 扶南国はカムボジアである。『梁書』海南諸国伝四八に国王憍陳如は天監二年に珊瑚仏像を、同十八年に天竺梅檀瑞像を献じ、大同五年、その国に仏髪があるのを聞いて、武帝は沙門雲宝を遣わしてこれを得た。また、『続高僧伝』によると、武帝は大同中に遣使して大乘諸論と共に真諦三蔵を迎え、同三蔵は太清二年(五四八)に京師に着いた。つまり、扶南国からは檀像と仏髪と三蔵が至っているのである。

(53) いずれも『仏祖統記』三七にある。武帝の時代には天監十年と十八年に檀像が、大同十年に玉刻仏像が至っているのである。註(52)参照。